



第241号

連携室だより



公益財団法人
北海道医療団

帯広第一病院



帯広第一病院理念・基本方針

【理念】

地域に信頼される病院を目指し、質の高い、思いやりのある医療サービスを提供する。

【基本方針】

- 1 患者の皆様の安全と権利を守ります。
- 2 地域医療機関との連携を推進します。
- 3 救急医療の充実に努めます。
- 4 研修や教育を積極的に行います。
- 5 働きがいのある職場を作ります。

帯広西病院 着任されました医師よりご挨拶



いたがき りょう
板垣 翔

令和8年1月より帯広西病院に着任いたしました医師の板垣翔と申します。帯広西病院では3階療養病棟を担当させていただきます。

これまで出身地であります関東エリアにおいて、主に大学病院を中心に急性期診療を専門に行って参りましたが、高齢化社会及び人口減少という時代背景においてより全人的な医療に携わるべく、このたび十勝でのご縁を頂くこととなりました。

AIなどテクノロジーの発展めまぐるしい昨今ですが、変わることはない人の営みである生老病死に医師として寄り添えるよう努めて参ります。

何卒宜しくお願い致します。

公益財団法人北海道医療団
帯広西病院

〒080-2473

帯広市西23条南1丁目129番地

TEL 0155-37-3330

FAX 0155-37-2038



今号の内容

- ・帯広西病院 着任されました医師よりご挨拶 (1)
- ・退職医師挨拶 (2) (3)
- ・CPC (臨床病理検討会) 開催報告 院長 井伊 貴幸 (4)

退職医師よりご挨拶



総合診療科 部長 竹中 芳子

この度、帯広第一病院を令和8年3月末をもちまして退職することといたしました。至らぬところも多々ありましたが、在宅看取りなど多くの症例の診療を経験することができ、皆様の暖かいご指導とご支援の賜物とこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

今後は、広尾町国民健康保険病院にご縁をいただき、再び勤務することといたしました。こちらで得た経験を活かし、地域で暮らす方を最期まで支えるような医療を提供できるよう努力していければと考えております。同じ十勝管内での勤務となりますので、患者様をご紹介させていただく機会もあると存じます、今後とも変わらぬご指導・ご厚意を承りますよう、よろしくお願い申し上げます。



外科 専攻医 三塚 裕斗

初期研修から後期研修までの4年間、大変お世話になりました。初めての朝の採血検査から徐々に外科専攻医として手術をさせて頂くまでに多くの医師、看護師を始めとする方々にご指導いただきました。また初期研修期間では地域の様々な病院の先生方にもご指導いただき感謝申し上げます。外科専攻医として非常に多くの症例を学ばせていただきました。ここで学んだ医師としての大事な最初の4年間での経験を今後も活かしていけるように頑張ります。本当にありがとうございました。



歯科口腔外科 医員 中村 太郎

この度、令和8年3月をもちまして退職させていただくこととなりました。至らない点が多々ありましたが、部長の工藤先生には様々な場面でご指導いただき、その他病院関係者の皆様にも大変お世話になりました。

帯広第一病院は消化器系疾患を多く扱う病院であり、他科の先生方からのご紹介やNSTを通して、第一の消化器としての“口腔”を強く意識する一年でした。歯科疾患や義歯不良等の改善によって、患者さんの栄養状態の改善、ひいては全身状態の改善の一助となっていれば幸いですし、病院歯科に求められる大きな役割のひとつであると実感しました。

今後も帯広で経験したことを糧に、臨床で更なる研鑽を積んでまいります。短い間でしたが、本当にありがとうございました。



臨床研修医 梅田 匠

平素より大変お世話になっております。

この度、3月をもちまして帯広第一病院を退職させていただくこととなりました。

初期研修医として2年間、様々な症例や手技などを経験させていただき、とても楽しく研修できました。皆様には大変親切にご指導いただき、非常に充実した2年間でありました。

4月からは福島県の病院に赴任することとなっております。帯広第一病院で学んだことを糧に、引き続き外科専攻医としてさらに研鑽していきたいと思っております。

2年間と短い期間ではありましたが、十勝管内の皆様には大変お世話になりました。

本当にありがとうございました。



臨床研修医 濱田 篤史

故郷である帯広にて医師としての第一歩を踏み出し、早いもので二年が経過いたしました。当初は右も左も分からぬ身ではございましたが、諸先輩方やスタッフの皆様から温かいご指導を賜り、数多くの貴重な経験を積むことができました。

来年度からは北海道家庭医療学センターに入職し、四月より帯広協会病院総合診療科にて勤務する運びとなりました。今後も一層の自己研鑽に励み、将来的に十勝の医療に貢献できるよう精進してまいります。

同じ十勝の地域医療を支える一員として、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。帯広第一病院をはじめ、お世話になりました十勝の皆様にご心より感謝申し上げます。二年間、誠にありがとうございました。



CPC（臨床病理検討会）開催報告

院長 井伊 貴幸



十勝管内の先生方には日頃より大変お世話になっております。臨床研修プログラム責任者の井伊です。2026年3月5日に開催されましたCPC(Clinico-Pathological Conference)についてご報告申し上げます。

— 血球貪食症候群を呈した悪性リンパ腫の一例 —

本症例は血球貪食症候群(Hemophagocytic lymphohistiocytosis : HLH) が疑われた急速進行例であり、臨床経過と病理解剖所見を対比しながら検討を行いました。発表は研修医3名が担当し、北海道社会事業協会帯広病院病理診断科の三浦一郎先生、当院総合診療科医師の指導のもと、多職種で活発な議論が交わされました。

症例は高度炎症反応と全身状態悪化を伴い、脾腫を主体とした病態を呈していました。臨床的には感染症あるいは悪性疾患に伴う血球貪食症候群が疑われ、特に血液腫瘍の可能性が検討されていました。しかし感染症の関与を完全には否定できず、炎症反応が著明であったことからステロイド導入には慎重な判断が求められました。その後、病状は急速に悪化し、救命には至りませんでした。

病理解剖の結果、基礎疾患は悪性リンパ腫（びまん性大細胞型B細胞リンパ腫）であることが判明しました。結果論ではありますが、悪性リンパ腫に伴う血球貪食症候群として早期治療介入が可能であった場合、転帰が異なった可能性も示唆されました。本症例は、臨床診断から治療開始へ迅速につなげることの難しさを示すとともに、CPCを通じて最終診断に至る医学的意義を改めて認識する機会となりました。

本症例からの学び（Clinical Pearls）

① 血球貪食症候群(HLH)では「原因検索」と「治療開始」が同時進行となる

HLHは感染症・自己免疫疾患・悪性腫瘍など多彩な背景で発症し、確定診断を待つ間にも病態が急速に進行することから、鑑別を進めながら治療開始のタイミングを検討する必要がある。

② 強い炎症反応は感染症を示唆するとは限らない

悪性リンパ腫関連HLHでは著明な炎症反応を呈することがあり、感染症との鑑別が臨床的に極めて困難で「炎症＝感染」と単純化できない点が重要。

③ “治療的診断”の判断が予後を左右する場合がある

確定診断前であっても、臨床的可能性が高い場合には免疫抑制療法や専門科連携を早期に検討する必要があり、意思決定の難しさと重要性を再認識した。

当院では今後もCPCを継続的に開催し、診療経験を地域医療機関の先生方と共有しながら、医療の質向上に努めてまいります。ご協力いただきました患者さんご家族、三浦先生はじめ関係者の方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。



発行 公益財団法人北海道医療団 帯広第一病院 地域医療介護連携科

〒080-0014 帯広市西4条南15丁目17番地3

TEL 0155-25-3121（病院代表） / 0120-558-091（連携科直通）

FAX 0155-27-0248（連携科専用） e-mail renkei@zhi.or.jp

